

栗ヶ沢バプテスト教会 25-12-14 第三アドベント礼拝説教  
「マリアの賛歌」ルカ 1：46-56 木村一充牧師

アドベント第3週を迎えていました。イエス・キリストのご誕生を祝うクリスマス礼拝が、いよいよ1週間後に迫ってまいりました。クリスマス前の4週間という期間を特別に切り分け、この期間に静まって神の御子の誕生を待つという習慣を、ヨーロッパの教会は大切にしてきました。一日ずつカレンダーに穴を空け、その日まで過ごすアドベントカレンダーが、キリスト教書店に並べられるのもこの時期であります。旧約聖書では、神の民であるイスラエル（ユダヤ人）は、メシアがこの地上に救い主として来られる日を何百年にもわたって待ち望んでいました。それに比べたら、新約聖書の教会が定めているこの待降節、すなわちクリスマス前の4週間の期間は、びっくりするほど短い期間だと、鼻で笑われるかもしれません。

そのアドベント3週の本日の聖書箇所は、ルカによる福音書1章46節以下です。「マリアの賛歌」と小見出しが付いています。本日の箇所の前のところで、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」と天使に答えたマリアは、そのあとすぐ親戚のエリザベトが住むユダの山里に出かけました。しかも「急いで山里に向かい、」と39節に書かれています。マリアの住んでいたナザレからユダの村まで、距離にしておよそ100キロあります。女の子の足だと、どんなに急いでも3、4日はかかったことでしょう。ちなみに、このエリザベトの山里のことを「エインカレム」と言います。そこは、エルサレムの西側に広がる盆地状の地形の中にある静かな村で、現在ここには「マリアの訪問教会」が立っています。エルサレムの東側は死海につながる地方で、そこは砂と岩が転がっている荒れ野の大地が広がる生気のない地域です。しかし、エルサレムの西側に行くと、（地中海の側です）そこには木々が生い茂る緑の山里がある。そこでは鳥たちが巣を張り、小鳥のさえずる声も聞こえる。わが国ではどこにでも見られる光景ですが、イスラエルでは命の潤いを感じさせる場所です。エインカレムとはヘブル語で「泉の里」という意味で、エリザベトの村は「エインカレム」と呼ばれているのです。

そのエリザベトの家にマリアは出かけた。危険な旅を押して、マリアはエリザベトに何としても会いたかったのです。なぜでしょうか。それはマリアもエリザベトも、天使の御告げによって妊娠の出来事を告げ知らされた女性たちだったからです。しかも、二人とも常識では考えられないような想定外の仕方で子どもを宿し、あなたは身ごもって男の子を生む、と天使から言われています。すでに年をとっていたエリザベトの方は、妊娠してから5か月の間身を隠していたとあります。自分の身に起こったことの意味が分からず、それを事実として認め受け入れるために5か月の期間が必要だったのだと思います。マリアの身に起きたこともこれと同じだった。マリアはエリザベトおばさんに会い、神の子を宿すという想定外の出来事が、エリザベト同様、神から出たことであることを、確かめようとしたに違いありません。マリアの挨拶をエリザベトが聞いたとき、お腹の中の子が胎内でおどったと41節にあります。妊娠6か月のお腹の子（ヨハネ）が喜びおどったというのです。しかも、エリザベトはマリアに「わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしよう」と言って、マリアの胎の男の子を「わたしの主」と呼んでいる。マリアの子どもが生まれる前からエリザベトは「イエスさまは、私の主です」と告白しているのです。マリアもエリザベトも、「主がおっしゃることは必ず実現する」ことを信じています。共に主の言葉を聞いて受け入れる謙遜な心を持ち、主が語られたことが真実であることを顔と顔を合わせて確かめあうことができる関係、そのような信仰の友、同士を持つことがどれほど幸いなことであるか！ここで歳の差など関係ありません。同じ体験を共有し、それによって神の言葉が真実であると認め合う関係が、この二人の女性の間には成立していたのです。

そこで、このエリザベトの言葉を聞いて、マリアは神へのほめ歌（賛歌）を歌い始めます。47節の「わたしの魂は主をあがめ…」で始まるこの賛歌は、ラテン語の聖書から「マグニフィカート」と呼ばれます。この言葉は、ラテン語の動詞で「大きくする」という意味を持つ言葉です。地震の大きさを示す「マグニチュード」の語源になっている言葉です。ちなみに、ギリシャ語の原文のほうでは、「メガルノー」という動詞が使われています。これはメガフォンとか、メガロポリスという言葉と語幹「メガ」を共有する言葉で、同じく「大きくする」という意味です。「わたしの魂は、主を大きくする」とマリアは歌うのです。マリアは「わたしは大きくする」とは言わず、「わたしの魂は、主を大きくする」と言いました。この「魂」は「プシュケ」という言葉です。息をすることから来た言葉で、生命、生き物、心、魂など新約聖書ではさまざまに訳し方がされています。マリアは、エリザベトの言葉を聞いて自分の中で起こうとしている救い主の母となるという出来事を受け入れ、クリスマスの謎を心の奥深いところで理解しようとしています。その時、マリアの体ではなくその「魂」が呼び出す感覚に陥ったのです。もうずいぶん前のことですが、新聞の人物紹介のコーナーで、滅多に一位を出さないことで知られる国際ピアノコンクールで、日本人として初めて1位を獲得した若い女性ピアニストが紹介されています。

した。彼女は同僚から「天才肌のピアニスト」と呼ばれていたといいます。その彼女が、演奏で一番気を付けていることは「自分が弾いている」という感覚を持たないことだといいます。「私が、この曲を弾いているのよ」と思わない。そういう感情を持つことは嫌いだといいます。さらに「こここの部分を聞いてちょうだい」と思いながら弾くことも嫌いだという。では、どのようなことを心掛けて弾いているのか。それは「聴衆と一緒に、純粋に音楽に耳を傾けたい」ということだそうです。その彼女の言葉を聞きながら、私は自分の説教がひとりよがりの説教になつていはしないかと、胸に手を当てさせられました。説教において、聞き手は牧師の言葉を聞いていられるではありません。そうではなく、説教者が誰であれその人格（ペルソナ）を突き抜けたところで響く神の声を聞いているのです。音楽もそうだと彼女は言っているようです。自分の能力や演奏技術を誇るのではない。聴衆と一緒にになって、自分をうち消し、純粋に音楽そのものを聞こうとする。そうして弾いたら、なんと1位になった。このときのマリアもそうだったのではないか。

週報の巻頭言にも書きましたが、このマリアの賛歌は、彼女が自分の頭で一から考えて作り上げた歌ではありません。たとえば、旧約聖書のサムエル記上2章に出てくる「ハンナの祈り」にこの歌は似ています。マリアは、ハンナが祈ったこの賛歌を覚えていた。それを下敷きにして口ずさんだところ、次から次へと主を賛美する言葉があふれ出てきたのでしょうか。そのとき、マリアが賛美しているのではなく、マリアの魂が主を賛美しているのです。優れた作曲家、あるいは作家（小説家）も同じような経験をすることがあるのではないでしょうか。次々と頭の中にメロディや文章が浮かんでくる。疲れなど吹き飛んで、眠る間もなく一気に最後まで音符や文章を書き上げたら、ほぼ完璧に一つの作品が出来上がっていた。そんな体験を彼らも経験するに違いないのです。

では、このマリアの賛歌の中心をなしているメッセージは何でしょうか。それは神による「逆転」が救い主の誕生によって起きるという預言です。この逆転は「革命」と言ってよいかもしれません。現実のこの世界を見ると、世界の各地で自然災害や火災が発生し、さらに長く続く戦争がもたらす悲しみや叫びが絶えません。世界はますます悪くなっているとさえ思えます。ロシアによるウクライナ侵攻は、2022年2月から3年以上続き、来年は丸4年になります。米国を中心とした仲裁案、すなわち非武装地帯化の提案をロシアは拒否し、東部2州をロシア領として認めさせようとしています。あまりにも自己中心な考えだと言わざるを得ません。しかし、このような現実世界の悲惨や不義を、神が変えてくださるとマリアは言います。具体的には、つぎの3つの革命が起るとマリアは言います。

その第一は51節以下です。「主はその腕で力をふるい、思い上がる者をうち散らし」とマリアは歌います。それは「道徳的革命」の預言です。神を信じることは、一人一人の心の中にある高慢さを打ち碎くことです。私たちの中にどれほど「自分を高ぶる」思いがあることでしょうか。しかし、イエス・キリストを信じるとは私たち自身の「高慢さ」を滅ぼすことです。自分を低くして主を大きくするのです。

二番目の革命は52節以下に記されます。「権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ…」とマリアは歌います。このことは「社会的革命」といえるかもしれません。キリスト教信仰において、この世の地位や尊れ、あるいは社会的な身分がその人の価値を表すものではありません。そうではない。イエス・キリストはすべての人を救うためにこの世に来られ、そして、死んでくださいました。社会的な階級や身分は過ぎ去るものです。第一コリント書13章にあるように、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。これらがない処では、いかにこの世的に恵まれようと、そこに本当の喜び・命はありません。

三番目の革命は53節に書かれます。「飢えた人を良いもので満たし、富める人を空腹のままで追い返されます」これは「経済的革命」です。現実のこの世は、欲望によって地上に富を積みあげる利得中心主義の社会です。お金を稼ぐこと自体が罪であるわけではありません。稼ぐ力のある人は大いに稼いでよいのです。しかし、大切なことはその利益を少ししか持つことができない人のために分かちあうことです。クリスマスのメッセージの一つに使徒パウロがコリントの教会で信徒たち伝えた次の言葉があります「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためである」（Ⅱコリント8:9）。神は貧しい者を富ませるお方だと、パウロは説くのです。

以上のようなマリアの賛歌を聞くときに思わされること、それはクリスマスの出来事によって、神はこの世で低く小さくされた人のためにこの世に来られたということです。そして、本当のことを言えば、すべての人が神の前では小さな存在なのです。神は、ご自身を低くして地上に来られ、すべての人を罪の縄目から解き放ち、すべての人に生きる喜びと命を与るために、そのひとり子を遣わしてくださいました。しかも、マリアという小さくされた女性を、救い主の母としてお選びになりました。そこには、この当時、人数にも数えられなかつた女性に光を当て、女性をクリスマスの主役として立てたルカのまなざしがあります。マリアの賛歌は、クリスマスの希望を指し示しています。私たちが神の前に低くされ、また低く小さくされた人と連帯して生きようとするとき、このマリアの賛歌が、将来への希望と今この時の慰めのメッセージとして聞くことができるのです。

お祈りいたします。